

ウィリアム・マザーウェルの『バラッド集』に見る ピーター・バッハンの影

Peter Buchan in Motherwell's *Minstrelsy: Ancient and Modern*

井上 清子

Summary

In 1825 and 1826, William Motherwell collected ballads and songs from the mouths of the singers in the west of Scotland and recorded the fruits of his efforts in his manuscript. It contains about 270 texts, of which some 200 items were collected by him and the rest were mainly obtained from his correspondent, Peter Buchan of Peterhead.

Motherwell printed fourteen pieces from Buchan's collection, including the six written down by James Nicol, in his 1827 publication, *Minstrelsy: Ancient and Modern*; however, except for a few cases, he seldom acknowledged the sources of them.

Motherwell himself collected a great number of ballads and songs from the oral tradition. Therefore, it appears that he, in fact, had enough items to publish. In practice, however, he made use of Buchan's texts; in some cases, he deliberately removed his own and printed Buchan's. He might have been intending to make his publication perfect, just like those that contain a variety of different ballads and songs of which the versions are complete — on occasion, even pretending that (Buchan's) few items come from his own collection?

Buchan generously gave his texts to Motherwell. Motherwell probably did not give any to Buchan in return. The fact that he was, to a certain extent, forced to depend on Buchan's collection in order to make his own more solid may reflect the situation in the west of Scotland in the mid-1820s: only a limited number of ballads and songs were circulating, no matter how many versions of them, complete or fragmentary, were generally known to people.

The significance of the appearance of Buchan's items in the *Minstrelsy* should be elucidated.

It may be more profound than we might expect.



マザーウェル (William Motherwell, 1797-1835) は、1825年から1826年にかけて、スコットランド西部地方を中心に伝承のバラッドや歌謡の収集と記録を行い、1827年にはバラッド集 (*Minstrelsy: Ancient and Modern*, Glasgow, 以下『バラッド集』と略記) を出版している。当時スコットランドは、近代化に向けて急激に変化しつつあり、それと呼応するかのよう口承の伝統は急速に失われつつあった。マザーウェルの収集は、過去の伝承を故国の誇るべき遺産として、

可能な限り記録に残そうとするひとつの試みであったが、それは同時に、彼と志を同じくする人々の一連の活動に連なるものでもあった。

スコットランドにおいて、1730年代頃から開始された伝承のバラッドや歌謡の収集と記録、更にそれらの編集と出版は、19世紀初頭のスコット (Sir Walter Scott) のバラッド集出版の成功によって大きく盛り上がり、1820年代にその頂点に達した¹。次々に出版されるバラッド集は、そこに掲載されているバラッド (の版 [version; copy]) がいずれも、「吟唱 (recitation; singing) から記録されたものであること」、「初めて活字として出版されるものであること」、あるいは、「それまでに活字となったバラッドの不備を補う完全な形のものであること」を強調しており、マザーウェルもまた、自らの収集したバラッドを基に、そのような方針に立って『バラッド集』を編集したと思われる。そして彼のバラッド集は、出版時に相当に評価され、成功を収めた。しかし、彼が編集し出版したバラッドを詳細に検討する時、彼の姿勢には — 特に『バラッド集』後半において — ある種作意めいたものが見え、それは、当時スコットランドの伝承のバラッド自体が置かれていた状況に由来すると考えられるのである。

I

マザーウェルは、1797年にグラスゴー (Glasgow) で出生しているが、父親の事業の失敗もあってペイズリー (Paisley) に移り、同地のグラマー・スクールを卒業するとすぐ実社会に出た²。彼は、ペイズリーに置かれていた州裁判所の書記局 (office of the Sheriff-Clerk) に書記見習いとして入り、生来の文学志向もあって、職務の傍ら新聞や雑誌に詩などの投稿を始めた。1819年には州裁判所副書記官に任命され、生活の安定を得ると共に、文学活動に更に精力を注ぐことが可能となった。彼は、自身が居住する地方 (Renflewshire) の詩人達とその作品を主とする詩集の編集・出版の中心となり、成果 (*The Harp of Renflewshire*, Paisley, 1819) を世に送り出している。

従来からスコットランドの過去、特に騎士道の華やかであった時代に心を引かれていたマザーウェルは、やがて口承のバラッドに関心を寄せるようになった。口承のバラッド

¹ スコットランドにおける伝承のバラッドや歌謡の収集及び編集・出版が本格的に開始されたのは、Allan Ramsay (ed.), *The Tea-Table Miscellany, or Choice Songs, Scots and English*, 3 vols. (Edinburgh, 1724-27) 位からであると思われるが、David Herd (ed.), *The Ancient and Modern Scots Songs, Heroic Ballads, etc.* (Edinburgh, 1769) 以降、19世紀前半にかけて、Walter Scott (ed.), *Minstrelsy of the Scottish Border*, 3 vols. (Vol. I-II, Kelso, 1802; Vol. III, Edinburgh, 1803) も含めて多数のバラッド集や歌謡集が出版されている。その詳細に関しては、Francis James Child (ed.), *The English and Scottish Popular Ballads*, 5 vols. (New York, 1965), rpt. of the 1882-98 ed., V, 400-3参照。

² 以下、Motherwellの経歴の詳細に関しては、*The Poetical Works of William Motherwell with Memoir by James M'Conechy, Esq.*, 3d ed. (Glasgow, 1849), pp. xv-lxviiiに拠る。因に、Mary E. Brown, *William Motherwell's Cultural Politics 1797-1835* (Lexington, 2001) は、Motherwellの生涯と文学・政治・ジャーナリズム等の領域における活動及び業績の全般を論じている。

は、今こそ形が損なわれ質も低下しているが、最終的には、吟遊詩人の時代にその源流を求め得る文学であると、彼には思われたからである。また1820年代のスコットランドは、近代化に向けての急激な社会変化の中で、急速に失われていく伝承を記録に留めんとする試みの行われていた時代でもあった。そしてその一環として、口承のバラッドや歌謡の収集と記録、及びそれらの編集と出版が相次ぎ、大きな盛り上がりを見せていた。

1824年頃からペイズリーを中心に、伝承のバラッドや歌謡の収集と記録に着手したマザーウェルは、近隣各地に吟唱者 (reciter; singer) を訪ね歩き、また何人もの協力者を得た。そして、翌1825年には大きな収穫を挙げた。それらは後に、彼の手で700頁を超える大部の二つ折判 (folio) の稿本 (Motherwell's *MS*, 以下*MS*と略記) にまとめられ、現在に至っている³。

マザーウェルがバラッドや歌謡の収集を行っていたのと同じ1825年に、スコットランド北東部 (Aberdeenshire) のピーターヘッド (Peterhead) でバラッド集 (*Gleanings of Scotch, English, and Irish Scarce Old Ballads*) が出版された。それは、バッハン (Peter Buchan, 1790-1854) 編集の、小さな収集 (collection) であったが、マザーウェルの注意を引いたようである。彼がそれまで目にしたことのなかったバラッドが何編か含まれており、また「序 (Preface)」で編者が、消失しつつある口承の伝統を記録に残そうとする自らの努力に、読者の協力を求める中で、「未編集未出版のバラッド数百を所有している」と述べていたからである。

マザーウェルは、1826年1月4日付でバッハンに書簡を寄せ⁴、自らも同好の士であることを伝えると共に、関心を寄せているバラッド約10編について質問や依頼を試みた。折り返し1月17日付でバッハンから返事があり、マザーウェルの問に対する答と併せて、彼が未入手のバラッドの詞句が同封され、更に、今後の交信を望む旨が記されていた。

バッハンは、1790年にピーターヘッドで出生し、41年後にグラスゴーに移るまで同地に居住した⁵。彼は、基本的な教育を受けた後、1816年に印刷業者として独立し、余暇に、従来から関心のあった伝承のバラッドや歌謡の収集と記録を行うようになった。そして、マザーウェルが『バラッド集』出版後は、詩作や新聞雑誌記事の執筆、更には新聞の編集へと活動の重点を移したのに対し、生涯にわたってスコットランド北東部の伝承のバ

³ Motherwell's *MS*は、現在Glasgow University Library 所蔵 (Murray 501)。その内容の詳細に関しては、拙稿「マザーウェル稿本の全体像について」*CALEDONIA*, No. 27 (日本カレドニア学会) 及び、「マザーウェル稿本の全体像について 付表 (Appendix)」*CALEDONIA*, No. 28参照。

⁴ 以下、MotherwellとBuchanの往復書簡は、Glasgow University Library: MS Robertson 9/2 Copy of Correspondence between Motherwell and Peter Buchan 1826-1832, 並びに、Houghton Library, Harvard University: 25263.19.6F*Buchan, P. A Collection of letters [MSS] に拠る。因にMotherwellは、*Gleanings*の書評を*Paisley Advertiser*紙 (26 Aug.1826) に寄稿している。

⁵ 以下、Buchanの生涯と、彼のバラッドや歌謡の収集及びそれらを記録した稿本の全般に関しては、William Walker, *Peter Buchan and Other Papers on Scottish and English Ballads and Songs* (Aberdeen, 1915), pp. 17-128, 159-67, 172-95参照。

ラッドや歌謡、民話、伝説などの収集と記録を続けた。彼はその間に、収集したバラッドや歌謡に関しては、1,112頁に及ぶ大部の二つ折判稿本を初めとして、数巻の稿本をまとめ⁶、また1828年には二巻本のバラッド集 (*Ancient Ballads and Songs of the North of Scotland*, Edinburgh) を出版している。マザーウェルとバッハンの通信は1832年1月まで続き、マザーウェルから12通、バッハンから18通の書簡が送られた。

バラッドやバラッド集出版に関連する書簡は、当然ながら1828年1月頃までに集中している。それらの中には、バラッド (の版) に関する種々の情報と共に、口承のバラッド収集の実態や問題点、出版業界の現状、数名のバラッド編集者に対する批判、バッハンの1828年のバラッド集出版に至る経緯といったことが記され、加えて身辺雑事が語られている。更に書簡と併せて、バッハンからは、バラッドの詞句、チャップブック (chap-book)、ブロードサイド (broadside)、古今の歌集などが相当数マザーウェルに送られ、また前述の1,112頁の稿本を含めて3巻の稿本や、後述するニコル (James Nicol) が出典のバラッドの草稿 (MSS) などが貸与された。マザーウェルからは、『バラッド集』の各分冊及び一巻本の体裁の『バラッド集』、自らが出版した詩集 (*The Harp*), 1827年に出版されたキンロックのバラッド集 (George R. Kinloch [ed.], *Ancient Scottish Ballads*, London and Edinburgh), 自身の執筆になるバッハンのバラッド集 (*Ancient Ballads and Songs*) の書評⁷ (の抜刷り) 60部などが送られた。

両者の書簡に見る限り、マザーウェルとバッハンは、スコットランドの伝承文化の一端を担う口承のバラッドや歌謡を、それらが急速に消失しつつある時代に、可能な限り収集し記録に留めようとする点で共鳴し、互の活動に助力を惜しむことがなかったと思われる。しかし現実には、とりわけバラッドの収集や記録、更にそれらの出版に関して、バッハンが、一方的にマザーウェルに資料を提供し貢献し続ける結果となり、マザーウェルがバッハンの活動に貢献することは殆どなかったようである。

II

バッハンは、マザーウェルとの通信の中で、時にマザーウェルの依頼に応じ、時に自ら進んで何編ものバラッドや歌謡の詞句を書簡に同封した⁸。また彼は、当時出版に向けて

⁶ Buchanが自身の収集したバラッドや歌謡をまとめた稿本の主なものは、Houghton Library, Harvard University: 25241.10.5F*“The Ancient Unpublished National Ballads of Scotland, 1827,”及びBritish Library: Additional MSS 29408-9 “Ancient Minstrelsy of the North of Scotland”である。

⁷ Buchanが1828年に出版したバラッド集に関するMotherwellの書評は、当時Motherwellが編集を行っていた月刊誌*The Paisley Magazine*, No. 13, Vol. I (December 1, 1828), 639-62に、“Ancient Ballads of the North of Scotland”のタイトルで掲載された。

⁸ “The Minister’s daughter of New York” (Child 20 I), “The jolly Goshawk” (Child 96C), “Wallace (Sir William Wallace)” (Child 157G), “The Cruel Mother” (Child 20F) の全連 (all stanzas);及び, “Sweet William” (Child 216C), “Tiftie’s Annie” (Child 233C)の第1連など。尚、バラッドのタイトルの後は、Childのバラッド集全5巻 (上掲) におけるバラッド・ナンバーを示す。以下、同じ。

準備中であつた前掲1,112頁の稿本を、出版業者との折衝がうまく行かず一度手元に引き上げた折に、マザーウェルに貸し与えて精読することを認めている。マザーウェルは、自らのバラッド集出版準備の進度に合わせて、その稿本から、1827年11月頃までに6編、更に同年末頃に18編を選んでMSに転記した。また1830年頃には、バツハンの上記以外の稿本から3編のバラッドを筆写し、同じくMSに加えた⁹。

マザーウェルは、バツハンの収集したバラッドにも心を引かれたが、何にも増して魅力を感じたのは、ニコルに由来するバラッドであつた。今まで彼が目にしたことのない珍しいものが含まれており、それ故彼には、『バラッド集』に掲載するに値する極めて貴重なものに思われたのである。1826年6月5日付書簡において、マザーウェルは次のように述べている:「ニコル氏の草稿を拝借し感謝致しております。今、その一部を返却申し上げます。... 同氏の草稿を克服できずにいるのがお分かりになると存じます。正直なところ、ニコル氏の悪筆 (ill formed characters) は解読し難く、幾つも読み違いがあると考えられます。しかしニコル氏は、実に古いバラッド (ancient song) の宝庫 (mine) のように思えます。その宝物のような記憶を、書き記して送ってお貰いになるとは、何とも羨ましい限りです。」

ニコルの生年は不明である¹⁰。彼は、アバディンシアのストリッケン (Strichen) で出生し、若い頃アメリカに渡って3年ほど生活したこともあつた。帰国後は、生地ストリッケンで樽製造職人 (cooper) として生計を立て、マザーウェルやバツハンが伝承のバラッドや歌謡の収集を行っていた1820年代には、同地で小さな商店を営んでいた。彼は、食料雑貨と併せて書籍、パンフレット、ブロードサイド、及びそれらに類似のものも販売したが、政治や宗教に関して革新的な意見を持っており、自身も相当数のパンフレット類を執筆・出版している。そして1840年の死亡時には、近隣の貧困家庭の子供達に初等教育を施すための学校を設立すべく、遺産400ポンドを遺した。

ニコルは、若い頃近くに住む老人達が歌っていたバラッドを多数覚えており、後年記憶を基にそれらを書き留めては、各地のバラッド愛好家や収集家、書籍出版業者 (bookseller) などに送り始めた。バツハンはニコルから、1824年に6編、更に1826年初めに6編のバラッドを記した草稿を送られ、前者のうちの4編を、出典は示さずに1825年出版

⁹ MotherwellがNicolの草稿及びBuchanの稿本から、自身の稿本に転記したバラッドの詳細に関しては、上掲の拙稿、特に「付表 (Appendix)」を参照。尚、Motherwell's MS, pp. 550-53に転記されたバラッド, "Sir Patrick Spens" (Child 58 I)は、Motherwellが、*Minstrelsy*のIntroduction, p. lxxvii に、出典がBuchanであることを明示の上、第6-9連を掲載していることを、ここに追記するものである。

¹⁰ Nicolの経歴の詳細に関しては、William Walker, *op. cit.*, p. 126参照。

のバラッド集 (*Gleanings*) に掲載している¹¹。マザーウェルが借用したのは後者である。

しかし、マザーウェルがニコルに由来するバラッドに接したのは、それが最初ではない。彼は、エディンバラ (Edinburgh) のバラッド収集家で当時親交のあったシャープ (C. K. Sharpe) から、折にふれてニコルのバラッドを計7編送られており、そのうち比較的早い時期に入手した2編を、「シャープ氏から送付されたバラッド」として、『バラッド集』に掲載している。更に、時期は不明であるが、直接ニコルからもバラッドを1編送られている。

ニコルが、過去の記憶を辿って文字にしたバラッドは、判明している限りで21編を数えるが¹²、バッハン、マザーウェル、シャープに加えて、メイドメント (James Maidment)、スコットなどの手にわたり、各々の稿本に転記されたり、編集を経てバラッド集に掲載されたりする過程で、60を下らぬ版に膨張していることが確認される。

ニコルは、18世紀後半、即ち、スコットランド北東部が農業や産業の基本的な構造変化を経験し、近代社会へと発展していく混乱期に伝承されていたバラッドを記憶したと思われる。従って、後年彼が筆記したバラッドは、古来の口承の伝統を踏まえてはいるが、当時人々の間に普及し始めた（英語の）読み書きの力 (literacy)、更にそれに伴う思考様式の変化の大きな影響を受けたものであった。抛って、全体的に見てそれらは、従来の定型化された様式が安定を失い、流動化していく過程にあったバラッドといえる。物語の構造や展開の統一性、一貫性、凝縮性といったことが、あまり留意されず恣意的となり、また定型的な表現が、吟唱者の創作による文学的表現、チャップブックやブロードサイド更には聖書などに見出される語句や表現（の借用）といったものと雑多な形で混在している。また、教育の普及とそれに伴う読書量の増加によって定着した論理的な思考様式が、物語の登場人物の言動や各場面の描写を、写実的合理的なものに変容させ、加えて、吟唱者自身の考えや感情が詞句の中に散見される。

ニコルに由来するバラッドのこういった特徴は、伝承のバラッドに対する鋭い洞察力を備えていたマザーウェルには、即把握されたと思われる¹³。従ってそれらのバラッドは、彼が理想とする本来の規範的な伝承のバラッドとは、相当にかけ離れたものであったといえよう。

しかし、ニコルの記憶したバラッドが、18世紀後半のスコットランド北東部に流布して

¹¹ *Gleanings*に掲載されたバラッドは、Buchanの1826年1月17日付Motherwell宛書簡によれば、“Lord Salton and Auchanachie” (Child 239A), “Bonny John Seton” (Child 198A), “Mary Hamilton” (Child 173M), 及び“The Fire of Fren draught” (Child 196A)で、*Gleanings*, pp. 161-69にまとめて印刷されている。

¹² Nicolが出典のバラッドの伝播、及びそれらの特徴に関しては、David Buchan, *The Ballad and the Folk* (London and Boston, 1972), pp. 223-43, p. 309参照。

¹³ Motherwellは、*Minstrelsy*, Introductionにおいて伝承のバラッドを論じているが、そこに示される鋭い洞察力は、後代の研究者から高く評価されている。たとえば、David Buchan, *ibid.*, p. 60.

いたものであり、その地方が当時近代化に向かう混乱期にあったとすれば、マザーウェルが口承のバラッドや歌謡の収集と記録を行った西部地方は、それより遥かに早い時期に近代化に直面していた筈であった。故に、マザーウェルが得た収穫そのものが、時の流れの中で相当な変容を蒙り、質的にもかなり低下していたと思われる。彼が『バラッド集』に掲載し、「吟唱から記録され、初めて活字となるバラッド」と宣言し得るものは、従って極めて限られていたであろう。その意味において、ニコルのバラッドは（難点は指摘されるとしても）、マザーウェルにとって貴重なものであったと考えられる。

ともあれ、最終的にマザーウェルは、自らが収集した約200編のバラッドに加えて、バッハン、ニコル、その他の協力者から約70編のバラッドや歌謡を入手した。自身が収集したバラッドに限定しても、それらは、1巻のバラッド集を出版するには十分な資料であろう。自らが吟唱者から収集し記録したバラッドを、編集し出版することは、どの収集家にとっても恐らくは理想とするところである。バラッドが吟唱される傍らでそれを筆記し、併せて採録の日時、採録地、吟唱者の氏名や簡単な個人史に至るまで記録することに留意したマザーウェルであれば、その思いは殊更に強い筈であった。

III

マザーウェルの編集による『バラッド集』が、一卷本として出版されたのは1827年12月である¹⁴。しかしその編集自体は1824年に開始されており、分冊 (part) の形で順次出版が行われて来た。当初マザーウェルを含む複数の編集者が編集に携わり、第3もしくは第4分冊まで出版した後、第5分冊を編集に、何らかの理由で編集者の移動があったと思われる。マザーウェルを除く全員が引退し、彼一人が編集を引き継ぐことになった。第5分冊は、複数の編集者の手を経て出版されており、従ってマザーウェルが単独で編集に着手したのは第6分冊以降である。

『バラッド集』（の分冊）の、当該時点に至るまでの編集法は一貫していない。吟唱から記録されたバラッド、マザーウェル自身によって書かれた詩、既存のバラッド集から転載されたバラッドなどが、脈絡なしに掲載され、加えて、複数のバラッド（の版）を巧みに組み合わせた合成のバラッドが見出される¹⁵。そしてそれらの中で、大半を占めているのは他のバラッド集からの転載である。

¹⁴ *Minstrelsy*が、最終的に一卷本にまとめられるに至る過程、及びMotherwellの編集法の変化の詳細は、Emily B. Lyle (ed.), *Andrew Crawford's Collection of Ballads and Songs*, 2 vols. (Edinburgh, 1975-96), I, xvii-xviii, 及びWilliam B. McCarthy, "William Motherwell as Field Collector," *Folk Music Journal*, vol. 5, no. 3 (1987), 310-13参照。

¹⁵ 上掲Childは、Motherwellが稿本に記録したバラッドと*Minstrelsy*に掲載したバラッドの詳細な校合を行っており、本稿もその校合に負うところが大きい。合成バラッドに関しては、中でも“Hynd Horn” (*Minstrelsy*, pp. 35-43), “Johnie Scot” (*Minstrelsy*, pp. 204-17), “Lord Jamie Douglas” (*Minstrelsy*, Appendix, pp. v-ix) が、各々3版、3版、6版を合成して作られたものであると、Childは、全5巻の当該のバラッドの項で述べている。

マザーウェルは、従来の手法に従って分冊の編集と出版を続けることも可能であったと思われる。しかし彼は、第7分冊の編集に向かう中で方針を大きく転換した。既存のバラッド集からの転載やバラッドの合成を極力廃し、自身が吟唱者から収集したバラッドの編集と出版を開始したのである。第7分冊は、掲載されているバラッドになお手法の混乱が見られるが、第8分冊以降第10分冊まで、一部を例外として、MSに典拠を求め得るバラッドが掲載されている。そして、第11分冊に着手した頃と思われるが、マザーウェルは、バッハンを通して、ニコルの記録したバラッド6編に接する機会を得た。それらは、前述のように、それまでに出版されたどのバラッド集にも殆ど例を見ない、彼にとって極めて珍しいものであった。

その事実が恐らくは第一の理由であろうが、以後マザーウェルは、各分冊に、自身の収集したバラッドと共にニコルのバラッドを掲載し始める。しかし現実には、彼が約200編のバラッドを、主に吟唱者から収集したにも拘わらず、分冊の出版を重ねるにつれて、「初めて活字になる」、「これまでに出版されたどの版にも見られぬ連 (stanza) が歌い込まれている」といった観点、即ち、編集者がバラッド集出版にあたって最も強調し、また読者が最も期待する要素に見合う、手持ちのバラッドが少なくなっていたことも、彼がニコルのバラッドを援用し始めた、今ひとつの大きな理由ではなかったか。

更にその後、分冊の出版が終了して、「補遺 (Appendix)」と「序論 (Introduction)」を準備し、バラッド集を一巻本としてまとめていく過程で、マザーウェルは、バッハンの収集したバラッドをも援用し始めるのである。

当時出版されたバラッド集は、掲載しているバラッドが吟唱から記録された場合、吟唱者の名を、一部の例外を除いて明示していない。しかし、既存のバラッド集、特に著名なバラッド集から転載もしくは引用を行えば、典拠を示すのが常であった。ニコルはさて置き、バッハンも過去に2度バラッド集を出版している。更に彼は、大部の稿本を — シャープやレイング (David Laing) といった、エディンバラでも知名の文人達の助力を得ながら — 編集中であり、それも近い将来出版が概ね保証されていた。バッハンも典拠とするのであれば、その名は明示するに値すると思われる。

事実マザーウェルは、ニコルに由来するバラッドを掲載するにあたって、最初の2編は出典を示している: 「このバラッドは初めて活字となるが、ピーターヘッドのピーター・バッハン氏に負うものであり、ストリッケンのジェイムズ・ニコル氏から彼に送付された (“Young Hastings the Groom,” *Minstrelsy*, pp. 287-90, [Child 41C])」, 「これまで、この優れたバラッドは活字となったことがない。ここに掲載するものは、ストリッケンのニコル氏の吟唱に拠っており、ピーターヘッドのバッハン氏から送付された。同氏には、この種の貢献に対して感謝するところが大きい (“Reedisdale and Wise William,” *Minstrelsy*, pp. 298-304, [Child 246A])」。

しかし、残る4編に対するマザーウェルの態度は不可解である：「これは、よく知られた国境バラッド(Border Ballad)の北国の版(a North Country version)である(“Billie Archie,” *Minstrelsy*, pp.335-39, [Child 188D])」, 「断片的(fragment)であるが、欠けている箇所が今後補われることを期待してここに掲載する(“Young Bearwell,” *Minstrelsy*, pp. 345-49, [Child 302])」, 「吟唱に拠る(“Kemp Owyne,” *Minstrelsy*, pp. 373-77, [Child 34A])」, 「スコットランドでは、種々の版が流布している。ここに掲載する版は、北部諸州の一州で吟唱から採られ、これまでに活字となった(版の)中で、最も詳細かつ精巧なものである(“Earl Richard,” *Minstrelsy*, pp. 377-90, [Child 110E])」。

バッハンは、1827年2月16日付のマザーウェル宛書簡で、以下のように述べている：「“Lang Johnny Moir”の完全な版も入手致しましたが、...全部を出版に向けて準備致すつもりでおります。それ故、至急ニコルの草稿を返送して戴きたく存じます。中に、どのようなバラッドが記されているかを知り、出版予定のバラッド集にそれらを掲載する所存です。同時に、その中のどのバラッドを活字になさったか、あるいは活字になさる御予定かも知らせて戴けると有り難く — 現在のところ、自らが草稿の形で入手したのでなければ、過去50年間に作られた(composed)如何なるバラッドも、来たるべきバラッド集には掲載しない覚悟です。

出版なさるバラッド集の中に、私が典拠であると明記して下さるのであれば、前述の計画を損なうことなくニコルのバラッドを活字にすることが可能と存じます。そのように明記して下さることが必要なのです。そうでなければ — それらのバラッドが(既に活字となり)人々の目に触れたのであれば — 出版予定のバラッド集に掲載致すことは、私の意に添わず、すぐに草稿を送ることが不都合とお思いでしたら、どうかそれらのタイトルのリストを送って下さるようお願い致します。」

バッハンは、ニコルの草稿の内容をよく確認しないままマザーウェルに送ったようであるが、同年3月8日付書簡でマザーウェルは、借用していた草稿を返却する旨伝え、「私のバラッド集は、少しの部分と譜面を除いて印刷が終了致しました。そのうちお送りできると存じます。何らかの不意の事件でもなければ、数週間以内に出版可能と思っております」と述べている。更に彼は、自身のバラッド集にどのようにニコルのバラッドを掲載し、そしてそのために、どのバラッドを移動させたかを付記している。因に、マザーウェルに宛てた書簡に拠れば、バッハンは1827年4月の時点で、ニコルの草稿の残りとして、「リチャード伯爵(“Earl Richard”)」などが掲載された最終分冊を、そして1828年1月26日の時点で、一卷本の形の『バラッド集』を受領している。

しかし恐らくバッハンは、マザーウェルの姿勢にある種の不信を禁じ得なかったのであろう。1828年に出版したバラッド集の第2巻に、当該のニコルのバラッドのうち5編を掲載するにあたり、「若者のヘイスティングズ(“Young Hastings”)」の注解(NOTES)で

次のように述べている:「剽窃 (plagiarism) の謗りを免れるために、またこのバラッド集に既に活字となったものを掲載したと非難されることを避けるために: このバラッドは、他の数編のバラッドと共に、ストリッケンのニコル氏から草稿の形で私に送付されたものである。同氏は、それらを若い頃に老人達から習い覚え、後年記憶を甦らせて筆記したのである。この草稿を私は、友人である『バラッド集』の編者に送り、彼はそれらを、その貴重な書 (valuable work) に掲載した... 上述の草稿に記録されているバラッドとは、Young Hastings, Reedisdale and Wise William, Billie Archie, Young Bearwell, Kemp Owyne, 及びEarl Richard である。」

マザーウェルは、単独で編集を行い始めて以降、『バラッド集』の本文でニコルの6編に加えて、バッハンから草稿の形で送られたバラッド(“The Jolly Goshawk,” *Minstrelsy*, pp. 353-60, [Child 96C])を掲載し、更にバッハンの1825年出版のバラッド集 (*Gleanings*) から1編 (“Willie Wallace,” *Minstrelsy*, pp.364-69) を転載している。彼は、後者に関して出典を明示しているが、前者については出典に一切言及せず、単に「相当な美しさを備えたバラッドである『陽気な大鷹 (“The Gay Goshawk”)』 — スコット氏のバラッド集 (*Border Minstrelsy*) において初めて活字となった — の不完全な版 (less complete version) である」とのみ述べている。

更にマザーウェルは、『バラッド集』の「補遺」においてバッハンに由来するバラッドを2編、「序論」において4編 — 各バラッドの連の総て、もしくは一部 — 掲載しているが、典拠を示しているのは、「序論」で引用された最初の2編 (“Sir Cauline,” Introduction, p. lxvi, 及び“Sir Patrick Spens,” Introduction, p. lxvii, の各脚注) においてのみである。

バッハンは、1827年11月頃から翌年初めにかけて、前述のように、1,112頁に及ぶ稿本の出版に関してエディンバラの出版業者との折衝が行き詰まり、出版を断念しかけた時期があった。彼から、書簡を通して相談を受けたマザーウェルは、自らの意志を曲げぬよう激励すると共に、1827年11月23日付書簡で次のように述べている:「私のバラッド集は、間違いなく来月には出版されるでしょう... その中で、機会があり、また思い出すことのできる限り、貴兄の稿本のことをかなり強く推しておきました。これまでに活字となった(バラッドの)版より完全で(ampler)美しい版を多数収めていると述べておきました。私のバラッド集が出版されましたら、貴兄の出版に幾分ともお役に立つと存じます。」

この時期に、マザーウェルはバッハンの当該の稿本を借用し、速読の上、自身の出版に必要と思われる箇所を筆写を行ったようであるが、追って1828年1月9日付書簡で:「今、精読のために借用致し、出版の御予定もおありの稿本ほど珍しく、また価値あるものを他に存じません。それは、その分野で最良の収集のひとつとなり、伝承文学に極めて

貴重な一頁を加えるものと存じます。．．．私が最近出版致しましたバラッド集の中で、多くの折にその収集の素晴らしさに触れました。．．．私の目的が稿本類 (MSS) について執筆することであれば、もっと多くの機会に貴兄の稿本に言及も可能でしたが、記述が専ら過去に出版されたバラッド集に限定されておりましたので、言及を脚注の中の然るべき箇所限定せざるを得ませんでした。因に、貴兄の稿本を熟読致す際に、私の心に触れました多くの箇所を、意のままに利用させて載いたことを (at liberty to avail myself of many things which struck me), ここに申し添えておきたいと存じます。」

事実マザーウェルは「序論」において、バッハンの当該の稿本、1825年出版のバラッド集、更にはバッハンの収集活動その他に、約16箇所と言及しており、誠実にその約束を果たしたといえよう。またバッハンのバラッド集が出版された後も、彼の依頼に応じて極めて好意的な長い書評を書き、当時自身が編集していた月刊雑誌に掲載の上、抜刷り60部を、1829年12月19日付書簡と共にバッハンに送付している。

マザーウェルのこういった行動と、『バラッド集』において (ニコルの草稿も含め) バッハンの収集したバラッドに対処する姿勢には、何か相容れぬものがあるように感じられる。彼は、伝承のバラッドや歌謡の収集と記録、更にそれらの編集と出版に関して、バッハンの一連の活動を評価し、また多くの助力を惜しまぬように見えながら、『バラッド集』に掲載したバッハン出典のバラッドに対しては、多分にその旨明示することを避けているかのように — 極言すれば、それらが誰の収集に拠るのでもなく、更に極言すれば、自らの収集に拠るかの印象を与えようとしているように思われる。

1820年代当時のスコットランドにおいて、伝承のバラッドや歌謡の収集と記録、及び編集と出版は、一見着実に行われ成功を収めているかに見えながら、実際は厳しい現実と直面していたようである。社会が近代化に向けて大きく変動する中で、伝承のバラッドや歌謡を吟唱可能な人は多くの地方で激減し、ましてや、それらを古来の整った形で、あるいは多種多様に、継承している人の数は極めて限られていたであろう。従って、結果的には — 往々にして金銭の授受を伴いながら¹⁶ — 少数の吟唱者から採録されたバラッドや歌謡が、収集家や編集者の間を、転記と脚色を繰り返されながら、循環し続けることになった。相当な費用を費やして収集したバラッドや歌謡を、編集し出版するとしても、それほど大きくはない市場で成功の見込みがあるのは、目新しい出版、換言すれば、初めて活字

¹⁶ 1例として、Nicolが、“Lord Ingram and Chiel Wyet” (Child 66A) のバラッドを記したMSSを、Edinburghの書籍出版業者であるDavid Websterに売り、それをWebsterが、自身と接触のあるC. K. Sharpeに手渡し、更にSharpeからMaidmentやMotherwellへと伝播している (McCarthy, *op. cit.*, p. 297)。またMotherwellが野外収集に用いたノートに拠れば、彼は、バラッドの吟唱者に相当額の金銭を与えている (Houghton Library, Harvard University: 25242.16, Copy of Motherwell's Notebook, p. 156)。

となるバラッドを、それも多種掲載している収集本であった¹⁷。

西部地方、即ち、スコットランドで比較的早い時期に近代化が開始された地域において、伝承のバラッドや歌謡の収集の、ある種限界に近い状態に直面していたと考えられるマザーウェルの目に¹⁸ 社会の流動化が遅れた北東部に由来するバラッドや歌謡は新鮮なものに映ったであろう。そしてそれらを、バッハンやニコルといった本来の典拠からの借用でなく、自身の収集に拠るものとして読者に呈示し得るのであれば、...ここに、マザーウェルの心の闇の領域があるかに思われる。

以上、簡単ではあるが、『バラッド集』に掲載されたバッハン出典のバラッドが暗示するところを論じた。『バラッド集』には、ニコルを典拠とするものも含めて、バッハンが収集したバラッド14編が、全連もくしは部分的に採録されている。その比率は必ずしも高いとは言い難いが、マザーウェルが、自身の収集したバラッドを何編も移動させてまでそれらを掲載した意味は、存外に大きい。マザーウェルが収集の基盤とした地方は、当時国内でもとりわけ急速に伝承の風化が進んでいたと思われ、その意味において、既に「遅れて来た人」であった彼が、自らの遅れを埋め合わせるべく援用したものこそ、比較的近代化の遅かった北東部の、バッハンが収集したバラッドであったといえるからである。

付記：本稿は、2001年度日本カレドニア学会第2回研究会（6月30日 於大阪）における口頭発表に加筆したものである。

[CALEDONIA（日本カレドニア学会）30（2002）1-12: 日本カレドニア学会より転載許可]

¹⁷ たとえば、Buchanの1,112頁に及ぶ稿本の出版に関し、Edinburghの出版業者のJohn Stevensonから意見を求められたバラッド収集家のRobert Jamiesonは、出版界の現状からして、購読予約者を募り出版の安全をはかるのが望ましく、それでも三巻本の体裁にすれば、多くの予約者は望めないであろうと答えている(Walker, *op. cit.*, pp. 50-51)。またMotherwellもBuchanに宛てた書簡の中で、バラッド集出版とその成功の困難さに何度か言及している（拙稿「『出版』としてのバラッド集—William Motherwellの場合」, CALEDONIA, No. 18参照）。

¹⁸ Childに、Motherwellの稿本が現存することを知らせたGlasgowのJ. B. Murdochは、そこに記されているバラッドについて、“... There are altogether 228 ballads indexed but many of them are seemed third, and in some cases even fourth versions of the same ballad.”と述べている (Houghton Library, Harvard University: 25241.47F*, XI 7-13, Murdoch's notes on Manuscript ballads, Aug. 1873)。